

### つのキースタイル：厚みのある白さの志野（16世紀後半）

志野とは、瀬戸黒や黄瀬戸よりも少し後に登場したスタイルだ。白くて厚い釉薬に小さな穴が開いていたり、赤みがかったりするのが特徴である。「志野」の語源は定かではないが、「白」が転訛したという説や、白い茶碗を好んだとされる茶人・志野宗信（生年不詳-1523）にちなむという説がある。

志野が登場するまで、美濃の釉薬の主成分は木灰で、焼くと不透明になるものだった。志野は長石の釉薬をかけ、白く透き通った色にしている。この性質を利用して、陶工たちは成形した作品に酸化鉄の顔料で絵柄を描き、志野に釉薬をかけた。焼成すると、下の写真のように絵柄が透けて見える。顔料には、鉄やマンガンを多く含む鬼板と呼ばれる粘土が使われ、焼くと赤や黒、茶、紫などに変化する。透明な釉薬の下に絵柄を描くという組み合わせは、美濃の陶芸家が色やデザインにさまざまな工夫を凝らすことを可能にした。

その中には、絵柄と装飾の色を反転させた「鼠志野」というスタイルもある。陶工は作品に鉄粉を塗り、文様を削ってから長石釉をかけた。焼成すると、長石と鉄が融合して濃い灰色になり、削り取った部分は白くなる。